

愛を語るフランス文学

—もう一度読みたい文学の世界遺産—

清水 まさ志
(富山大学非常勤講師)



はじめに

二十一世紀の今もわが国で広く読まれているフランス文学作品は、おそらくたった一冊一アクトワヌ・ド・サン＝テグジュペリの『星の王子さま』だけなのではないだろうか。某インターネットショップサイトで検索してみても結果は同じである。明治期以降、日本語に訳された多くの作品もすでに訳が古び、現在の若者にはその日本語訳自体が難解となってしまうている。新訳を出版している奇抜な出版社もあるが、広く読まれているとはいえないだろう。しかしフランスはノーベル文学賞受賞者がもっとも多い国であり、その文学は一国の文学であるとともに文学的世界遺産だといえることができるだろう。さらに近代日本文学に大きな影響を与えた翻訳作品は、日本語文学の貴重な遺産だともいえる。このまま高度経済成長期に流行った世界文学全集の一部として古紙回収業者に回されているものであろうか。現代の日本において過去のフランス文学作品をどう読み直したらいいのか考えていきたい。

1. 「恋愛」と「大人の女性」

二十一世紀の日本において、男女の恋愛はあらゆるところで語られ、そして誰もが自由に恋愛できるし、その結果結婚することもできる。しかし今世紀に入ってから、「少子化」、「負け犬」、「婚活」、「草食系男子」といった言葉が雑誌やマスコミで取り沙汰され、男女が恋愛するのも、結婚するのも難しいといった状況が話題にされている。一方、フランスが「恋愛大国」「大人の女性」「EU一の出生率」「多様な家族形態」という点から日本で語られるようになってきた。こうした現代日本におけるフランスのプレゼンテーションは、フランスの実情に基づくにせよ、わが国の実情を反映したものだと考えられるだろう。

「恋愛」と「大人の女性」の国、フランス。このイメージは、それゆえ日本の状況を嘆く言葉とともにある種の憧憬のまなざしで語られる。女性に積極的でパートナーを大切にしているフランス人男性、そしてカップル単位の行動が基本の社会生活、さらに若い女性ばかりをちやほやすることなく大人の女性が恋愛の主役である国、こうしたイメージは現地の実情がどうあれわが国の実情を裏返しにした理想像だろう。すなわち、そうしたフランスに比べ、女性に積極的にアプローチもできず、

パートナーも大切にせず、さらに若い女性ばかりをちやほやする日本人男性……。フランスのイメージは、このように日本女性の不満に呼応している側面を持っている。しかし日本女性のフランス鼻屑に対して、日本の男性は反発するどころかもはや無関心とっていい態度ではなからうか。今の日本は、現実の恋愛がなくとも、それを埋めるに足るいろいろなコンテンツで溢れ返っているからだ。

マンガ、アニメ、ゲーム、アイドル、こうしたコンテンツは、もともとは現実の恋愛以前の子供に対して疑似恋愛を提供するコンテンツとして機能していたはずだが、もはや子供どころか広い年齢層にわたり受け入れられている。そしてこうした文化が、今や日本文化の代表として全世界に発信され、海外でも人気を博している。毎年パリで開催されている日本文化の紹介イベント「Japan Expo」は2012年に二十万人の来場者を記録した。日本の対極と思われていたフランスにおいてまで、日本社会を凝縮したような文化が人気だとなると、フランスを手本として担ぎ出す言葉も説得力をもって耳に入ってこない。

しかしフランスが「大人」を中心とする文化を築いてきたことに間違いはなく、むしろ「子供」に対する文化が手薄だったからこそ、日本の「子供」を中心とした文化がフランスに流入したと考えられるのであり、これまでフランスが築いてきた文化は、そこが手薄なわが国にもっと受け入れられてしかるべきだろう。それでこそ一方的でない文化の交流が生まれるというものだろう。それゆえ、われわれの目指す場所は現代のフランスの状況ばかりでなく、それを育ててきた過去のフランス文学作品のなかに求められるのではないだろうか。

2. 愛し合う二人は誰なのか？

小説にせよ、詩にせよ、演劇にせよ、映画にせよ、恋愛を題材にした作品の基本形は「ボーイ・ミーツ・ガール」だと言われる。わが国においても一般的に、未婚の男女が出会い、恋に落ち、愛し合い、結婚に至る、これがいわば正統的な恋愛だと考えられているだろう。そして男女の恋愛は、描かれるに従い状況も設定もどんどん複雑化し時に奇抜さを増していく。ただ男女の恋愛ストーリーを考える場合、その配役は四つであり、その組み合わせも四通りにすぎない。

四役：「若い男性」／「大人の男性」／「若い女性」／「大人の女性」

四通りの組み合わせ：「若い男性×若い女性」／「大人の男性×大人の女性」／「若い男性×大人の女性」／「大人の男性×若い女性」

もちろん昔から「男性×男性」、「女性×女性」という設定も行われてきたが、異性間の恋愛ストーリーに関して言えば、この四役と四つの組み合わせになる。

この四パターンの組み合わせがあっても、その国の文化と国民性に応じて、その比率は変わる。わが国の場合、若い女性に圧倒的に人気が傾くため、「若い男性×若い女性」、「大人の男性×若い女性」の組み合わせばかりで、大人の女性が恋愛の主役になることが少なかった。しかし未婚の大人の女性が増えるにつれ、あるいは離婚率が増大するにつれ、「大人の女性×大人の男性」、「大人の女性×若い男性」の恋愛ストーリーの需要が高まることは当然であろう。ただこうした組み合わ

せの恋愛は現実的にまだまだ少なく、それゆえ女性側からの不満の声となっているであろう。

「大人の女性」を中心とした恋愛ストーリーは、この四つの配役に未婚・既婚という条件をつけるとき、倫理的問題を招きやすい。「未婚×未婚」は倫理的にまったく問題ないが、「既婚×未婚」、「既婚×既婚」は倫理的に問題とされる。倫理的に言えば、「未婚の若い男性×未婚の若い女性」、「未婚の大人の男性×未婚の大人の女性」以外の組み合わせ、「既婚の大人の男性×既婚の大人の女性」「未婚の若い女性×既婚の大人の男性」「既婚の大人の女性×未婚の若い男性」は不倫となり、世間に明るみになれば社会的制裁の対象ともなりかねない。しかし人間は倫理性においてのみ恋愛するわけではないので、往々にしてそうした組み合わせの恋愛ストーリーが語られてきた。それでも若い女性が圧倒的に恋愛対象となるわが国では、不倫の恋愛ストーリーでも「未婚の若い女性×既婚の大人の男性」の組み合わせが圧倒的であった。戦前に姦通罪が存在したわが国において、「既婚の大人の女性」の恋愛は、社会的・倫理的な問題が最も大きかったので、その社会的通念は戦後も続いてきたといえるかもしれない。

男性は未婚・既婚に関わらず、若い時も大人の時も若い女性を恋愛対象として選ぶのにも関わらず、女性は若い時は男性全体から関心をもたれる一方、大人になるやいなや男性全体から関心をもたれなくなる。この恋愛における男女の差が、日本において遠いフランスの状況を理想化してしまう原因となっていたと考えられる。「大人の女性」の「恋愛」、この点においてこそ、フランス文学が今もわが国で読まれる可能性を示しているだろう。

3. 西欧的恋愛の起源

日本は明治期以降急速に西欧の文化を取り入れてきた。その中に西欧的な男女の「恋愛」も含まれていたわけだが、わが国の伝統的な結婚制度を打ち破る「自由恋愛」として広まり、今やそれがごく当然のものとして考えられるに至った。しかし現在のわが国の状況を鑑みるにつけ、おそらく西欧的な男女の「恋愛」の本質を深く理解しないまま、制度的な問題と考へて取り入れてきた側面が強かったのではないだろうか。それゆえ、制度的には誰しもが「恋愛」可能な時代にもかかわらず、心理的には「恋愛」が困難な時代だと感じているのではないだろうか。

西欧的恋愛の起源は、十二世紀の南仏プロヴァンスに起こった宮廷風恋愛に求められる。若い騎士が領主の奥方に恋し、精神的で自己犠牲的な愛を捧げる。領主の奥方と騎士の恋愛は、組み合わせからいって「既婚の大人の女性×未婚の若い男性」の組み合わせであり、この組み合わせこそ西欧的にいえば「ザ・恋愛」の名に値するものである。

この愛の形は「トリスタンとイゾー」という作品で全ヨーロッパのものとなった。媚薬によって愛することを運命づけられた王妃イゾーと騎士トリスタンは、マルク王の妨害とあらゆる苦難にも負けず、死ぬまでお互いを求め合う。不倫関係に基づく反社会性に裏付けられ、死へと向かう破滅的な恋愛ストーリーは、われわれ日本人にとっても魅力的であるが、どちらかというとも生理的に馴染まないものではないだろうか。それゆえ、不倫という結婚制度を侵犯する反社会性や、男女の愛の名において死を選ぶという厭世観が、日本人にはどうもよく実感できないのだと考えられる。日

本人にとって未だに「愛する」という言葉は、日本語としてはこなれず、大げさで嘘っぽく響きがちである。男性にとっては、「好き」ならともかく「愛している」と、照れずにいうことは大変難しい。

フランス文学は「恋愛」の文学だというとき、基本的にはこの西欧的恋愛を中心主題に発展してきたからである。十七世紀フランスにおいて、貴族の女性はサロンを開き、この恋愛の起源を仰ぎ理想として語り合った。ラファイエット夫人の『クレヴの奥方』に始まる恋愛小説は、「既婚の大人の女性×未婚の若い男性」という組み合わせで、「ザ・恋愛」の心理を追求していく。

恋愛の原型が不倫の形を取ることは、社会的に見て当然であった。貴族にとって結婚は政略的なものであり、結婚相手と別の異性に恋愛感情を抱くことは避けがたかった。代々フランス国王は愛人を持ち、その愛人が政治的実権すら握っていた。「トリスタンとイゾー」以来の西欧的恋愛の伝統は、フランスにおいて十七世紀の『クレヴの奥方』から十八世紀のルソーの『新エロイズ』へと受け継がれていく。こうした恋愛はもともと上流社会の貴族の女性を主人公にしていたが、時を経るに従い、特にフランス革命を機にブルジョワ社会へと広がり、さらに一般化していく。西欧における恋愛の展開は、階級の上から下へと大衆化していく運動であったとも考えられるだろう。

フランス革命以降、ブルジョワ社会が台頭して以来、貴族の婦人によって代表されていた「恋愛」の主人公は、様々な形を取る。一方では、スタンダールの『赤と黒』やフロベールの『ボヴァリー夫人』において、プチ・ブルジョワ階級の既婚女性が、貴族的・騎士道的恋愛を真似て若い男性と恋愛するものの、ただの不倫として破滅の道をたどる。もう一方では、貴族や高級ブルジョワ男性を客とする高級娼婦の存在がクローズアップされる。ゾラの『ナナ』やデュマ・フィスの『椿姫』に登場する女性は、金銭によって春をひさぐ娼婦というより、恋愛を専門とする職業的貴婦人といえるだろう。「パリジェンヌ」というイメージも、こうした恋愛専門の女性、あるいは恋愛に適した女性として確立され、フランス＝「大人の女性」の「恋愛」という形で今に受け継がれていると考えられる。

4. 役割と人格、機能と個性

十二世紀の南仏に生まれた「恋愛」を起源として、十七世紀以降フランスにおいて発展していく、特に「大人の女性」を主人公とした恋愛小説は、いわば個人の価値をどこに置くかという点について考えさせられる。「不倫」が恋愛の本質に関わるのも、不倫関係は、個人を社会的役割・機能として認識する見方と、個人を人格・個性として認識する見方の対立を切実に浮き彫りにするからである。結婚制度は、個人を役割や機能に還元して認識する。例えば、女性を娘・嫁・母といった役割で認識し、さらに婚姻関係を本人の意思とは違う様々な状況の結果によって取り結ぶ。男性も息子・婿・父といった役割で認識され、さらに婚姻に際して本人の身分や地位や収入といった機能が重要視される。もちろん子孫を残すという機能的側面が重視されることはいうまでもない。

「恋愛」の意義とその価値は、こうした個人を社会的役割・機能において認識するやり方に対して、個人を他人とは異なる人格として、他人では代えることのできない個性として、そしてそうした個人の意思の結びつきとして認識する点にある。一言でいえば、男女の愛を単なる社会的・肉体的結

びつきから個人的・精神的結びつきへと転化する点にある。この点において、不倫という形は役割と人格、機能と個性、社会と個人の最高度のせめぎ合いとして、その男女の結びつきの本質を露わにする。愛のない婚姻関係を続けることは、婚姻制度を守る立場からは倫理的に適っていても、個人の意味を尊重する立場からいえば欺瞞的である。

それゆえ、恋愛の名において破滅する主人公の姿は、人格・個性が社会的役割・機能によって押しつぶされる悲劇的姿としてわれわれの心を感動させるのである。役割・機能と、人格・個性のいずれが大切なのか、つきつめれば社会と個人のいずれが重要なのか、この問題を絶えず突きつける。もちろん答えは容易に出ない。両方とも重要であり、両者の重要性がイコールであるならば理想的であるだろう。しかし歴史的にも現実的にも、両者がイコールになることは稀で、たえず社会が個人よりも優先され、役割や機能が人格や個性よりも重視されてきた。「恋愛」を主題にした文学作品は、それに対して絶えず個人の人格と個性の重要性、一言でいえば人間の尊厳を訴え続けてきたとっていいだろう。

5. エゴイズムは克服できるのか？

男女の「恋愛」は、究極的に言えば人は自分以外の他者を愛することができるのかという問題を内包している。男女の愛にも様々な形があり、往々にして自分のために相手を犠牲にする利己的なケースも多い。そして結局、人は自分しか愛し得ないという「エゴイズム」の勝利を宣言してはばからない場合も多い。あるいは自身の子供への愛という形ですり替えてしまいかねない。しかしトリストアンとイズーが、互いの愛を貫こうとして死を迎える姿は、単に二人の愛が反社会的ゆえ制裁を受けたと解釈するだけでは十分でない。二人の死は個人が社会に押しつぶされた結末と考えられると同時に、それが人間のエゴイズムに対する愛の勝利でもある点に逆説的な重要性がある。エゴイズムの基本原理は、自らの命が何よりも大事であるという点にあり、愛の名において他者のため自らの命を捨てる行為は、このエゴイズムを乗り越える行為だと見なすことができるからである。「トリストアンとイズー」以来綿々と受け継がれる愛と死というテーマは、本質的にこの問題に触れるものである。

食うか食われるか、エゴイズムのせめぎ合う人間社会において、男女の恋愛が、他者を役割や機能ではなく人格や個性として尊重する行為であるとき、その行為は勝ち目のない戦いではあるものの、死をもって最終的な救いが残されている。恋愛を主題とした文学作品は、愛の勝利としての死、エゴイズムの敗北としての死を描いてきたといえるだろう。

6. 「おばさん」と「コキュ」

日本社会において、若い女性ばかりをちやほやする傾向、そして結婚後に女性の恋愛を禁じる倫理観によって、結婚後の恋愛に無縁な大人の女性を「おばさん」という名で呼び習わしてきた。男性は結婚後社会で働き、女性は結婚後専業主婦として家庭を守り子育てを行う。こうした男女の役

割分担を社会の基盤としたとき、「おばさん」は必然的に作り出されたと考えられる。結婚後の女性が恋愛することは、この社会のシステムを根本的に揺るがすことになるからだ。なぜならば、男性が外で長時間働いている間に女性が別の男性と恋愛しているとすれば、男性は安心して外で働いていられないからである。「おばさん」と不倫を禁ずる倫理観は、男性中心社会を維持する要石として長い間機能してきたと考えられる。

この点でも日本の読者にとってフランス文学は理解しがたいものだろう。既婚の女性が結婚相手以外の男性を好きになったとき「恋愛」が発生したのならば、そこに必然的に結婚相手の男性の問題も同時に浮上してくる。フランス語の「コキュ（寝取られ夫）」という言葉ほど、長い間日本人の男性にとって実感のできない言葉はなかったとあっていいだろう。そういう筆者も学生時代、フランス文学のテキストを講読しながら、「コキュ」という言葉の滑稽さは頭で理解したものの、その恐怖について実感することはなかった。恋愛を軸にフランス文学を読めば、そこに「大人の女性」の喜びと葛藤の物語が見出されると同時に、「コキュ」の耐え難い苦しみの物語が見出される。「トリスタンとイゾー」において、過酷な迫害を加えたイゾーの夫マルク王は、単に邪悪な人物というより「コキュ」の苦しみと恐怖を体現した人物だと考えられるだろう。ラファイエット夫人の「クレーヴの奥方」に登場する夫クレーヴは、妻が精神的に別の男性を恋していることを知ったとき、苦しみのあまり命を落としてしまう。ルソーの「新エロイズ」でも、ジュリー夫婦と家庭教師サン＝プルーの三人の共同生活は、最後には破綻してしまう。さらにゾラの「ナナ」において、ミュファ伯爵は、自分は若い女性にうつつを抜かしていたにも関わらず、妻が不倫していると知るやいなや、恐るべき精神的苦痛に襲われ我を失ってしまう。男性にとってこの「コキュ」の苦しみこそ、何にも代えがたい精神的苦痛であり、その恐怖は男性中心社会を揺るがすほどのものである。現代の日本男性は未だこの恐怖を切実に感じていないのではないだろうか。フランス人男性がパートナーに優しいとすれば、それは何よりもこの「コキュ」の苦しみに対する切実さゆえだろう。換言すれば、人格と個性をなおざりにして役割と機能においてだけ個人を束縛することは不可能だということだろう。日本の社会はこの問題になるべく直面しないようにしてきたのではなからうか。結婚後の女性が現実的に「恋愛」しないよう、「恋愛」の代替物を提供することばかりが課題となっていたのではないだろうか。子育てはその最たるものであったし、近年自国や異国を問わず熱中できる男性アイドルを提供するのもひとつの策であったと考えるのはうがち過ぎであろうか。

おわりに 現代日本においてフランス文学を読む可能性

二十一世紀の日本において、過去のフランス文学を読むことは、女性にとっては、まさに「大人の女性」の恋愛の喜びと葛藤を発見するためであり、男性にとっては来るべき「コキュ」の苦しみに備えるためではないだろうか。確かに日本人は、フランス的な恋愛至上主義に全面的に共感できるわけではない。また、子供がいようと、もはや愛しえないパートナーとは別れ、愛する別のパートナーと暮らす結果、実母・実父が異なる子供と一緒に暮らすという、現代フランスの家族形態など、まだまだわが国で一般化するとは考えられない。結婚を就職活動になぞらえて「婚活」と呼び、

「でき婚」をどこか大目に見てしまう現代の風潮は、男女の結びつきにおいて、役割・機能が人格・個性に勝るといふ社会構造を浮き彫りにするばかりである。しかし、結婚年齢が上がり、また離婚率も増大し、育児期間の終わった後の人生も長いとなると、男女の結びつきを役割と機能の側面だけでとらえることはますますできなくなるだろう。男性がいくら大人の女性に「おばさん」化を望んでも、おばさんの期間はあまりに長すぎる。いずれ自らの人格と個性が認められることを望んで、現実的な恋愛を求めていくと考えられる。現代は女性が恋愛の代替物を求めて東奔西走している時代ではなかろうか。大人の女性が若いアイドルに熱中してみたり、美容で若さの限界を押し広げようと必死になっていたりする。男性ながら女性の心を持ったタレントが、「大人の女性」の意見を代弁してみせる。これはもはや日本の男性が潜在的に「コキュ」になっているということではないだろうか。今や男性もまた恋愛に対して態度の変化を求められているはずである。日本の男性が現実的な恋愛に消極的で代替物ばかり消費していたのでは、現実的な「コキュ」の苦しみを知らない。フランス文学の数々の作品が思い知らせてくれるのは、大人の男性にとってこの「コキュ」の苦しみこそ「恋愛」の本質を教えるものだという事である。その苦しみなしに男性は「大人」にはなれないのだ。

現実世界において男女が向き合い「恋愛」とは何かを考える時機ではないだろうか。恋愛は結婚への過程なのか、人間にとって役割と人格のいずれが重要なのか、他者を真に愛することは可能なのか、それぞれがこうした問題を考えることなくして恋愛はありえないだろう。フランス文学はずっとそれを考え、愛を語り続けてきたとあっていい。フランス文学をもう一度読み直すことは、それを考えるよすがになるだろう。フランス文学作品を読みながら誰かと愛を語り合えたら何よりではないだろうか。

※本稿は、平成23年度前期・後期および平成24年度前期・後期に開講された富山大学公開講座「愛を語るフランス文学」1～4の内容の一部をまとめたものである。

参考作品

マリー・ド・フランス（月村辰雄訳）『十二の恋の物語』、岩波文庫。ベディエ編（佐藤輝夫訳）『トリスタン・イゾーの物語』、岩波文庫。ラファイエット夫人（生島遼一訳）『クレヴの奥方』、岩波文庫。ルソー（安土正夫訳）『新エロイーズ』1～4、岩波文庫。アベ・プレヴォ（河盛好蔵訳）『マノン・レスコー』、岩波文庫。ラクロ（伊吹武彦訳）『危険な関係』上・下、岩波文庫。コンスタン（新庄嘉章訳）『アドルフ』、新潮文庫。バルザック（宮崎嶺雄訳）『谷間の百合』、岩波文庫。スタンダール（大岡昇平訳）『恋愛論』、新潮文庫。スタンダール（桑原武夫・生島遼一訳）『赤と黒』上・下、岩波文庫。メリメ（杉捷夫訳）『カルメン』、岩波文庫。ボードレール（安藤元雄訳）『悪の華』、集英社文庫。フロバール（伊吹武彦訳）『ボヴァリー夫人』上・下、岩波文庫。ゾラ（川口篤・古賀照一訳）『ナナ』、新潮文庫。デュマ・フィス（新庄嘉章訳）『椿姫』、新潮文庫。コレット（工藤庸子訳）『シエリ』、岩波文庫。サン＝テグジュペリ（河野万里子訳）『星の王子さま』、新潮文庫。

映像作品

映画：ジャック・ドゥミ監督『シェルブールの雨傘』、1964年。ジャン＝ピエール・ジュネ監督『アメリカ』、2001年。オペラ：『ビゼー・カルメン（オペラ対訳ライブラリー）』（安藤元雄訳）、音楽之友社、2000年。

参考文献

伊東俊太郎『十二世紀ルネサンス』、講談社学術文庫。ソースティン・ヴェブレン（高哲男訳）『有閑階級の理論』、ちくま学芸文庫。ヴェルナー・ゾンバルト（金森誠也訳）『恋愛と贅沢と資本主義』、講談社学術文庫。ソーニエ（小林善彦訳）『改訳 十七世紀フランス文学』、白水社文庫クセジュ。工藤庸子『フランス恋愛小説論』、岩波新書。夏目幸子『日仏カップル事情 日本女性はなぜモテる？』、光文社新書。中島さおり『パリの女は産んでいる〈恋愛大国フランス〉に子供が増えた理由』、ポプラ文庫。中島さおり『なぜフランスでは子どもが増えるのか フランス女性のライフスタイル』、講談社新書。吉村葉子『お金がなくても平気なフランス人お金があっても不安な日本人』、講談社文庫。佐藤絵子『フランス人の贅沢な節約生活』、祥伝社黄金文庫。